

## 序

奈良文化財研究所と中国遼寧省文物考古研究所は、1996年に協定書「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究—三燕都城等出土の鉄器およびその他金属器の保存研究」を締結して以来、継続して共同研究に取り組んでまいりました。この間、三燕文物の調査研究（1998～2001年度）、3 - 6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究（2002～2005年度）、朝陽地区隋唐墓の整理と研究（2006～2010年度）を遂行し、その成果は『三燕文物精粹』（中国語版2002年、日本語版2004年）、『東アジア考古学論叢』（2006年）、『朝陽地区隋唐墓の整理と研究』（2013年）などの出版物に結実しています。これらの成果は、日中の学会において高い評価を得ています。

本書は、両研究所の4期目の共同研究として2011年度から2015年度にかけておこなった「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」の成果を論文集というかたちでとりまとめたものです。本書の中国語版は、既に2017年12月に遼寧省で刊行になっています。本書では、全体を日本語に翻訳するとともに、中国側の論文については原文もあわせて掲載し、『東アジア考古学論叢Ⅱ』（奈良文化財研究所学報第98冊）として刊行することにしました。

遼西地域では曹魏代以降、騎馬民族である慕容鮮卑が盛んに活動し、東晋十六国期には三燕と総称される鮮卑系の国家が出現します。中国王朝の周縁に位置する東アジアの諸勢力の中でも、いち早く都城や仏教を導入して国家形成を進めた三燕の歴史や文化は、日本の古代国家の形成過程を理解する上でも大いに参考となるものです。またその独自の特色を持った騎馬文化は、朝鮮半島や日本列島に対しても大きな影響を与えています。

今回の共同研究では、初期の慕容鮮卑の墓地と目される大板営子墓地や、瓦葺基壇建物がまとめて検出された金嶺寺遺跡を中心に取り上げ、調査・研究を進めてまいりました。本書では、その検討成果やそれに付随する諸問題が活発に論じられており、今後の研究において大いに活用されるものと期待します。

本書の刊行を機に、両研究所の共同研究がますます発展し、日中両国の文化・学術交流がより一層深化することを祈念いたします。

2020年3月

独立行政法人 国立文化財機構  
奈良文化財研究所 所長

松村 恵 司